【論　　文】

「自然の搾取」について

―― 高畠素之，内田義彦，新訳『資本論』――

山　口　拓　美*

要　旨

内田義彦が『資本論の世界』（1966）で用いた「自然の搾取」という表現は，その後の『資本論』に基づく環境論によって引き継がれたが，必ずしも広く定着した表現とはなっておらず，これを使用しない論者も少なくない。このような事情の背景には，日本語訳『資本論』では自然物を対象とする場合 Ausbeutung ／ Exploitation が「搾取」と訳されてこなかったという事実があると考えられる。本稿は高畠素之による『資本論』全三巻完訳以降の主な邦訳『資本論』を取り上げ，Ausbeutung ／ Exploitation が各訳本においてどのように訳し分けられているのかを調べた。その上で，『資本論』第 1 巻にある Ausbeutung des Naturreichtums を，先人の訳業を尊重しその伝統を受け継ぎつつ，「自然的富の搾取」と訳すことが許されるのか否かを検討した。その結果，訳者によって「搾取」という訳語の使用法に相違があり，高畠訳以降の約 100 年の間に「搾取」が Ausbeutung ／ Exploitation の元来の意味を受け持つ方向に変化してきていることが分かった。

1　問題の所在

内田義彦は，名著『資本論の世界』（1966）の中で次のようなことを述べている。

『資本論』の用語である「搾取（アウスボイトゥング）という言葉」は「マルクス経済学の用語としてあまりにも自明な言葉になって」いるが，これが問題としているのは「人間の搾取だけかというとそうではない」。アウスボイトゥングとは「野を耕すとか，鉱山を掘りつくすこと」であり，資本主義社会では「自然の搾取が人間の搾取とともに，アウス＝徹底的に，あるいは十分にとか，なくしちゃうという複雑な意味内容を含めて，行われて」いるのであって，現代の事例を使えば「その極限が原子力による人間の徹底的な地球の支配であり，あるいは原子爆弾による人間と地球そのものの徹底的な破壊である」といえる。そして「人間が自然を徹底的に利用する，あるいは資本が人間を動かして人間と自然を徹底的に掘り尽くす――そうした状況をうつしとる」のが『資本論』の世界なのである（16-17 頁）。

人間の搾取とともに「自然の搾取」が行われているという内田のこの指摘は，後に公害や環境問題が深刻化するに及んで改めて注目され，『資本論』に基づく環境論に重要な視角を提供した。例えば，韓（2001）は「エコロジーとマルクス」について論述する中で「自然の『搾取』」

＊　神奈川大学経済学部教授

という用語を「積極的に使うべきであろう」（140 頁）と述べており，島崎（2007）も「資本の活動が人間のみならず，いかに自然環境を搾取し，貧困化し，汚染・破壊・攪乱へともたらすかのメカニズムを執拗に追求する」（24-25 頁）ことがエコマルクス主義の特徴の 1 つであると主張している。また，守（2001）のように，商品搾取定理を踏まえて「自然の搾取」を純理論的に取り扱う研究も進められてきた。

しかし，日本語世界において「自然の搾取」という表現は，「労働の搾取」とは異なり，いまだ十分に定着した表現にはなっていない。「搾取」といえば剰余価値理論が想起されるため，労働価値説と矛盾するように見える「自然の搾取」は，『資本論』の概念体系の中で安定した位置を見出しづらい印象を与える。実際，韓（2001）が「自然の『搾取』」を「積極的に使うべきであろう」と述べた際には，「マルクス理論における搾取の限定的意味にこだわらず」また「比喩の意味しかもたないとはいえ」（140 頁）と付言していたのであり，「自然の『搾取』」に対して「労働の搾取」とは異なった「比喩」としての位置付けを与えていた。また，島崎（2007）の上記引用文には注が付され，「自然への『搾取』という表現は，マルクス自身が使っていると見られる」として『資本論』第 3 巻の「地力の搾取や濫費（die Exploitation und Vergeudung der Bodenkräfte）」という語句をその証拠として挙げていた（25 頁）。つまり「自然の搾取」という表現を用いる際には，そのための釈明ないし事情説明が必要とされていたのである。近年においても，例えば松井（2024）では，「外的自然に対する搾取＝利用」（73 頁）という表現が使用され，これによって「自然の搾取」というストレートな表現が避けられている。また，大ベストセラーとなり日本社会に大きなインパクトを与えた斎藤（2020）では，「自然の搾取」は使用されていない。同書の小見出しの 1 つは「労働者も地球環境も搾取の対象」（30 頁）となっているが，本文の中では自然や地球環境を対象とする「搾取」は存在せず，代わりに用いられているのは「収奪」と「掠奪」である。また，また斎藤（2019）においても，「自然の濫用」や「自然の掠奪」が出てくるのに対して，「自然の搾取」という語句は存在しない。斎藤（2019, 2020）の中で唯一「自然の搾取」に相当する表現として用いられているのは「地力の搾取」であるが，これは上記の島崎（2007）でも使用されていた『資本論』第 3 巻からの引用である。斎藤（2020，2019）の自説の論述の中では，「自然の搾取」という表現は使われていない。

一方，この表現については，韓（2001）が「エコロジー関連の文献のなかに頻繁に登場し，またほとんどの場合，その根拠がマルクス理論に求められている」（139 頁）と述べていたように，英語世界では the exploitation of nature という表現がごく自然な形で使われている。例えば，斎藤（2020）と同時期に出版され，同趣旨の主張が展開されている Hickel（2020）では，the exploitation of nature だけでなく，capital's exploitation of nature（221 頁）や the capitalist exploitation of labour and nature（267 頁）という表現も使用されている。これは，人間の搾取とともに自然の搾取が行われているという内田義彦の『資本論の世界』を想起させる表現である。実際，Hickel（2020）の論述は，内田（1966）の「自然の搾取」論と同様の視角から，新たに現代のエコロジカルな問題状況を把握したといってよい内容になっている。

では，このような「自然の搾取」をめぐる英語世界と日本語世界との違いは何に由来するのであろうか。考えられる 1 つの要因は，英訳『資本論』には the exploitation of nature に相当する語句があるのに対して，邦訳『資本論』にはそれが存在しないということである。すなわち英訳の『資本論』第 1 巻には the industrial exploitation of water-power（Marx 1990, 328 頁）や exploitation of natural wealth（同上，524 頁），

さらにはthe planned exploitation of the soil（Marx 1976, 929 頁）[1] といった語句があるが，邦訳ではこれらは「水力の産業的利用」（マルクス 2020，664 頁）「自然的富の利用」（同上，1055 頁）「土地の計画的利用」（同上, 1332 頁）となっている。ドイツ語原文は die industrielle Ausbeutung der Wasserkraft（Marx 1962, 398 頁），Ausbeutung des Naturreichtums（同上, 632 頁），die planmäßige Ausbeutung der Erde（同上，790 頁）[2] であり，この Ausbeutung を英訳では exploitation とした一方, 邦訳ではこれが「搾取」ではなく「利用」とされたのである。主な日本語訳『資本論』の中で「自然の搾取」に類する語句は，上で見た第 3 巻の地代論に現れる「地力の搾取」だけである。もし第 1 巻の中の上記の語句が「搾取」という語を用いて訳されていたとすれば，とりわけ Ausbeutung des Naturreichtums が「自然的富の搾取」と訳されていたとすれば, 日本の論者も日本語文献の中で「自然の搾取」という表現をもっと遠慮なく使えていたのではないかと推察される。しかも，この語句は次の文の中に現れる。

> Gleich vermehrter Ausbeutung des Naturreichtums durch bloß höhere Spannung der Arbeitskraft, bilden Wissenschaft und Technik eine von der gegebnen Größe des funktionierenden Kapitals unabhängige Potenz seiner Expansion.（Marx 1962, 632 頁）

これは，人間の搾取とともに自然の搾取が行われているという内田（1966）の視角にほぼそのまま対応する文であるといえる。内田がいうように，『資本論』では人間の Ausbeutung と自然の Ausbeutung が同時に進行しているのであり，労働力に対しては「搾取」だが自然に対しては「利用」だ，というふうに切り離して別々に理解するのは適切ではない。労働力と自然の資本主義的アウスボイトゥングとして統一的に把握するのが『資本論』の趣旨に添っていると考えられる。したがって，「労働力の Ausbeutung」を「労働力の搾取」と訳すのであれば,「自然的富の Ausbeutung」も「自然的富の搾取」と訳す方がむしろ自然であるともいえる。そしてこの「自然的富の搾取」という語句が邦訳『資本論』第 1 巻の中に存在するようになれば，日本語世界における自然の搾取論に対してさらに強固な理論的基礎が与えられることにもなるはずである。「自然の搾取」を「比喩」と見なす必要もなくなるであろう。

しかし，このような処置は，長く読み継がれてきた『資本論』という古典の用語の取り扱いとして適切であるといえるのであろうか。

対象となるテキストが上で取り上げた Hickel（2020）のような一般書であれば，そこに現れる exploitation of nature を躊躇なく「自然の搾取」と訳すことは可能であろう。実際，この書の邦訳本ではこの英語表現が「自然の搾取」と訳されているところがある（ヒッケル 2023, 224）。しかし，翻訳の対象が『資本論』となれば話は別である。日本では，『資本論』全 3 巻の翻訳は，高畠素之の完訳から新日本出版社の改訂訳まで約 100 年の歴史がある。その間，ほとんどの日本人はこれらの邦訳によって『資本論』を読んできたのであり，また研究者の多くも，日本語で物を書く際には，高畠素之や長谷部文雄らによって導入された訳語を使用してきた。そしてこれらの訳語は，『資本論』関連の研究書や研究論文，解説書，教科書等を通じて

1） 1887 年の英訳では，この個所は the methodical cultivation of the soil（Marx 1990, 661 頁）となっていた。ドイツ語第 2 版を底本とした 2024 年の英訳では，the systematic collective exploitation of the earth（Marx 2024, 691 頁）となっている。時代とともに訳語が「土地の耕作」から「地球の搾取」へと進化したような印象があり示唆的である。

2） この個所はドイツ語第 2 版では die planmäßig gemeinsame Ausbeutung der Erde（Marx 1987, 682 頁）となっていた。

日本社会の中に深く浸透し定着してきている。とりわけ,「搾取」という訳語は,高畠訳以来『資本論』の剰余価値理論と一体となった語として使用されてきたところの極めて重要な用語である。それゆえ,『資本論』第1巻の Ausbeutung des Naturreichtums を「自然的富の利用」ではなく「自然的富の搾取」と訳し直すためには,高畠訳以降100年の翻訳の歴史を振り返り,この訳語の使用法を改めて検討してみる必要がある。そしてその上で,もし「搾取」という訳語が,従来の諸訳本において「自然的富の搾取」という表現と全く馴染まない仕方で使用されてきたのであれば,われわれは今後もこの表現を避けるのが無難であろう。しかし,Ausbeutung ／ Exploitation[3] という原語の「搾取」と「利用」への訳し分けが,必ずしも文脈によって厳格に確定していたのではなく,訳者の相違に応じてある程度変化してきたのであれば,そして,その変化の方向性が「搾取」という訳語の自然物への適用を必ずしも排除するようなものではないならば,先人の訳業およびマルクス経済学の伝統に敬意を払いつつ,今後 Ausbeutung des Naturreichtums を「自然的富の搾取」と訳す可能性も開かれることになると考えられる[4]。

そこで本稿では,『資本論』第1巻の邦訳を対象として,このような検討を加えることとし,主な邦訳本として高畠素之訳の改造社版(1927),長谷部文雄訳の青木書店版(1954a),岡崎次郎訳の大月書店マルクス＝エンゲルス全集版(1965),向坂逸郎訳の岩波文庫版(1969a, b),資本論翻訳委員会訳の新日本出版社版(1983),および新日本出版社版の改訂訳(2019, 2020)を取り上げる。ドイツ語原文については,高畠訳はマイスナー版を底本とし,長谷部訳はインスティテュート(アドラツキー)版,岡崎訳はヴェルケ版というように訳本によって差異があるが,これらのドイツ語版本の本文はいずれもエンゲルス編集の第4版であり,本稿の検討範囲内において各訳本のドイツ語原文は同一である。最新の新日本出版社版改定訳にヴェルケ版のページ数が記されていることから,ドイツ語原文の引用の際には高畠訳以下の全ての訳本についてヴェルケ版のテキストを用いる。

2　高畠素之訳改造社版『資本論』

いうまでもなく,日本語訳『資本論』の読者は高畠素之の訳業に多くを負っている。もちろん高畠訳『資本論』の中には他に取って代わられた訳語も少なくない。例えば,生産行程,余

3)　内田義彦は『資本論の世界』で「搾取」の原語を Ausbeutung として論を進めているが,『資本論』第1巻第7章第1節「労働力の搾取度」の原語は Der Exploitationsgrad der Arbeitskraft であり,邦訳版で「搾取」と訳されている原語の多くが Exploitation である。Exploitation はフランス語からの借用語であり,ドイツ語話者には外来語として受け取られる。このため,カウツキー版とコルシュ版の『資本論』第1巻では,Exploitation が Ausbeutung に直されている。また,インスティテュート版では,巻末の外来語対照表で Exploitation は Ausbeutung であると説明されている。よって本稿では,Ausbeutung と Exploitation は同一の意味を持つ語であると見なして Ausbeutung ／ Exploitation または Exploitation ／ Ausbeutung と表記する。この点については,山口(2024)参照。

4)　『資本論』の中の Exploitation ／ Ausbeutung を英訳に倣って全て「エクスプロイテーション」や「エクスプロイトする」と訳してしまえば,本稿が取り扱う用語上の問題は存在しなくなる(山口 2013)。しかし,日本には『資本論』の翻訳とマルクス経済学の長い伝統がある。また,「搾取」という語は日本社会の中に深く根を張り,一般の雑誌や新聞でも用いられているだけでなく,経済学以外の分野でも学術的分析のための用語として使用されている(例えば,趙 2023；2024,滝澤他 2025)。こうしたことに鑑みれば,この語を最大限活用する方向で検討を進めることも必要であると思われる。

剰価値，生産機関，本来的蓄積等がそのようなものだが，これらは長谷部文雄訳では生産過程，剰余価値，生産手段，本源的蓄積となっており，現在では長谷部訳の用語が一般的である。しかし，高畠が『資本論』に導入した訳語の圧倒的多数は今日でもそのまま使用されているのであって，Ausbeutung ／ Exploitation の訳語としての「搾取」と「利用」もそうである。Ausbeutung des Naturreichtums は，高畠訳では「自然富の利用」（マルクス 1927，594 頁）と訳されているが，本稿で取り上げるその後のすべての訳本においてもこの Ausbeutung は「利用」となっている。

高畠は，Ausbeutung ／ Exploitation の対象が人間ではない場合，たいてい「利用」を訳語として用いている。例えば，次の文がそうである。

> Diese Inkongruenz zwischen der Wertgröße und ihrem relativen Ausdruck ist von der Vulgärökonomie mit gewohntem Scharfsinn ausgebeutet worden.（Marx 1962, 69 頁）

これは，第 1 巻第 1 章の注 20 の中の文であり，序文の後の本論において最初に Ausbeutung ／ Exploitation が使われている個所である。これを高畠は次のように訳している。

> 価値量とその相対的表章との間の斯かる不一致は，俗学的経済学に依りお定まりの鋭さを以って利用されたところである。（マルクス 1927，25 頁）[5)]

もし高畠がこの個所を「利用された」ではなく「搾取された」と訳していたとすれば，あるいは「搾取された」と訳すことができていたとすれば，その後に登場する Ausbeutung ／ Exploitation はすべて「搾取」と訳され，したがって当然のことながら Ausbeutung des Naturreichtums も「自然富の搾取」と訳されていたことであろう。しかし，ここで「利用」という訳語が使用され，その後の多くの個所でも Ausbeutung ／ Exploitation は「利用」と訳されることになった。例えば，Momente …… ausgebeutet werden（Marx 1962, 152 頁），Schriften …… ausgebeutet hat（同上，178 頁），Ausbeutung ihres Gebrauchswerts（同上，343 頁），Besonderheiten ausbeutet（同上，374 頁），Maschinen exploitierenden Fabrikanten（同上，408 頁），Erfindung …… ausgebeutet ward（同上，415 頁），exploitierte Bestialität（同上，418 頁），“erste Zeit der jungen Liebe” gründlichst auszubeuten（同上，429 頁），gesellschaftlichen Produktionsprozesses …… seiner kapitalistischen Ausbeutung（同上，445 頁），Ausbeutung des Dampfwebstuhls（同上，452 頁），dessen gesellschaftliche Exploitationsform（同上，452 頁），exploitieren die gewohnheitsmäßige Unregelmäßigkeit（同上，502 頁），A. Smiths Satz auszubeuten（同上，617 頁），Exploitation neuer Erfindungen und Entdeckungen（同上，657 頁），Hungersnot …… ausgebeutet wurden（同上，739 頁），Ereignisse ausbeuteten（同上，743 頁），gesellschaftlich ausgebeutete …… Produktionsmittel（同上，790 頁），Ausbeutung von Eisenbahnen（同上，801 頁）といった個所では訳語として「利用」が使われている[6)]。

一方，Exploitation der Arbeitskraft をはじめとして，資本賃労働関係の文脈で Ausbeutung ／ Exploitation が出てくる場合，高畠はこれらをほぼ必ず「搾取」と訳している。

こうしたことから，高畠訳『資本論』においては事実上，次のような基本原則が採用されて

5） 引用に際し漢字を新字体に直し，旧かなづかいを現代かなづかいに改めた。以下同様。

6） ドイツ語引用文中の……は引用者による省略部分を示す。以下同様。

いることが分かる。すなわち，Ausbeutung／Exploitation に訳語をあてる際，労働する人間に対する Ausbeutung／Exploitation には「搾取」を使用し，それ以外の事物に対する Ausbeutung／Exploitation には「利用」を使用する，というのがそれである。

これにより，高畠訳『資本論』の読者は次のような理解に導かれることになる。すなわち，「搾取」とは労働者を対象とする資本家の行為である，というのがそれである。しかし，ドイツ語原書では，人間以外の事柄に対しても同じ Ausbeutung／Exploitation という語が多く使用され，しかも生産手段に対しても，土地のような自然物に対しても，Ausbeutung／Exploitation が使用されている。人間も自然も Ausbeutung／Exploitation の対象とされているのである。ところが，人間に対しては「搾取」，それ以外に対しては「利用」を訳語として使用するという翻訳の基本原則により，このようなマルクスの用語法が見えなくなっている。このため，翻訳だけで『資本論』を読んでいると，「自然の搾取」は不適切な表現だ，という評価が生じてしまうことになる。

また，高畠訳『資本論』には，この事情に加えて次のような問題もある。

高畠は，Ausbeutung／Exploitation が人間を対象とする場合これを「搾取」と訳したが，彼が「搾取」と訳した原語は Ausbeutung／Exploitation だけではない。彼は Ausbeutung／Exploitation 以外の様々なドイツ語原語を訳す際に「搾取」という語を使用している。例えば，maßloser Aussaugung der Arbeitskraft（Marx 1962, 253 頁）と in der Aussaugung der bezahlten Arbeitskraft（同上，268 頁）とい語句の中の Aussaugung は「搾取」と訳されている。また，Nur die Form, worin diese Mehrarbeit dem unmittelbaren Produzenten, dem Arbeiter, abgepreßt wird（同上，231 頁）という文の中の abgepreßt も「搾取」と訳されている。さらに，um mehr “Mehrarbeit” auszupressen（同上，262 頁）の auspressen も「搾取する」と訳されており，die vom Kapital erpreßbare Zufuhr der Arbeit（同上，323 頁）の erpreßbar も「搾取され得る」と訳されている。つまり，高畠訳では，Ausbeutung／Exploitation に加えて，Aussaugung, abpressen, auspressen, erpressen も「搾取」と訳されているのである。

以上を整理すれば，原語の Ausbeutung／Exploitation と訳語の「搾取」との関係は，次のようになる。

Ausbeutung／Exploitation	利用
Ausbeutung／Exploitation	搾取
Aussaugung	搾取
abpressen	搾取
auspressen	搾取
erpressen	搾取

このように，高畠訳において，原語の Ausbeutung／Exploitation と訳語の「搾取」とは少なくない意味のズレを伴って重なっている。Ausbeutung／Exploitation の意味は「利用」と「搾取」である一方，「搾取」の方は Ausbeutung／Exploitation だけでなく，Aussaugung, abpressen, auspressen, erpressen という意味も持っているのである。このことは，「搾取」という訳語が次の 2 つの意味を持つ可能性があることを暗示していると考えられる。すなわち，1 つ目は「利用」の類語としての「搾取」であり，「搾取的利用」あるいは「搾り取るような利用」あるいは「労働者から膏血を搾り取るような無遠慮で無慈悲な利用」という意味の，したがって比喩的な用法としての「搾取」である。2 つ目は，文字通り「搾り取る」という意味の搾取である。

Ausbeutung／Exploitation を辞書で調べれば，そのコアとなる意味合いは「利用」であるから，「搾取」は 1 つ目の意味で用いられていると理

解するのが妥当かもしれない[7]。しかし，高畠訳『資本論』では，「搾取」は2つ目の意味に大きく傾斜しているように考えられる。実際，上で示した例では「搾取する」と訳されていたauspressenは，次の文では「搾り取る」と訳されている。

> Es ist unmöglich, z. B. aus zwei Arbeitern so viel Mehrwert auszupressen als aus 24.（Marx 1962, 429頁）
> 一例を挙ぐれば，二十四人の労働者から搾り取る余剰価値量を，二人の労働者から搾り取ることは不可能である。（マルクス1927，388頁）

英訳では，このauszupressenはto squeeze（Marx 1990, 355頁）と訳されており，高畠が「搾取する」と訳したum mehr “Mehrarbeit” auszupressenの中のauszupressenはto extort（Marx 1990, 214頁）と訳されている。高畠訳では，「搾取」が「搾取的利用」というよりはむしろsqueezeやextortの意味で，文字通りの「搾り取る」という意味を保持しつつ使用されていると考えられる。そして，次のような個所がある。

> Auspumper von Mehrarbeit und Exploiteur von Arbeitskraft（Marx 1962, 328頁）
> 余剰労働を汲み出し，労働力から搾り取る所の者（マルクス1927，288頁）

このようにExploiteurが「搾り取る所の者」であるならば，Exploitationは「搾り取る」ということになり，したがってAusbeutungも「搾り取る」という意味を持つことになるであろう。高畠訳において「搾取」は，文字通りの「搾り取る」という意味を内包しつつ使用されているといえる[8]。

もちろん，上で記したように高畠は多くの個所でExploitation／Ausbeutungを「利用」と訳していたのであるから，彼が「搾取」という語の中に「利用」という意味を全く込めていなかったとも思われない。しかし，それでもやはり，高畠訳において「搾取」は「利用」というよりはむしろabpressen，auspressen，erpressenの方に傾いた意味の訳語として，「搾り取る」という意味の訳語として，機能している。そして，「搾取」が「搾り取る」であるならば，何か搾り取られる対象が想定されるのが自然である。「労働力の搾取」においては，それは剰余労働であり，さらには剰余価値がこの対象物として思念されることになる。封建領主が百姓から年貢や御用金を搾り取るように，資本家は労働者から剰余価値を搾り取るわけである。そしてここまでくれば，「搾取」と労働価値説とは融合し始める。剰余価値を生み出すのは労働だけなのだから，搾取の対象となるのも労働する人間だけだという類推が容易に作動する。そしてそうであるとすれば，「自然富の搾取」という表現はますます奇妙な響きを持つことになる。自然は富の，すなわち使用価値の源泉ではあるが，価値を形成する存在ではないからである。したがってAusbeutung des Naturreichtumsは，「自然富の搾取」ではなく「自然富の利用」と訳されることで自然な響きを持つことになる。

あるいは高畠は，「搾取」という語を労働価

7） 吉原（2008）では「搾取」が「搾取（exploitation ≡ to use selfishly and unfairly for one’s own advantage）」と説明されている（70頁）。現代のマルクス経済学においてもexploitationはto useの一形態であり，「利用」の類語として理解されているわけである。

8） 高畠は『マルクス学研究』（1919）の中で『資本論』の理論を解説しつつ「資本家が労働者より搾取したる剰余価値」（29頁）と述べている。この場合の「搾取」の意味は「搾取的利用」ではなく文字通りの「搾り取る」であるとしか解釈できないと考えられる。

値説と一体化したものと意識して翻訳を進めていたのではなかったかもしれない。しかし，出来上がった高畠訳『資本論』においては，労働者には「搾取」，人間以外の事物には「利用」というふうに，概ねきれいに使い分けられている。この翻訳原則により，高畠訳『資本論』は，「搾取」とは労働者を対象とする資本家の行為であるという理解を読者に届ける訳本になっている。そして，これに加えて「搾取」の意味が文字通り「搾り取る」であるとすれば，「搾取」とは剰余価値を搾り取ることだ，という読解が強化され，次のような認識を生じさせることにもなる。すなわち，「搾取」とは資本家が労働者から剰余価値を搾り取ることなのだから，「自然の搾取」というのは不自然な表現である，というのがそれである。

ただし，この高畠訳『資本論』においても，第3巻の地代論では次のように「土地力」という人間ではない存在に対して「搾取」が使われている。

> die Exploitation und Vergeudung der Bodenkräfte（Marx 1964, 820 頁）
> 土地力の搾取と濫蕩（マルクス 1928, 350 頁）

人間に対しては「搾取」を用い，それ以外に対しては「利用」を用いるという高畠の翻訳の基本原則からすれば，ここは「利用」が訳語として選択されるべきところである。しかし，ここでは Exploitation が Vergeudung（濫蕩）と並列されており，明らかに批判的・否定的な文脈の中に置かれている。であるとすれば，「利用」という訳語では批判的・否定的な意味が弱く，釣り合いが取れない。「濫蕩」との組み合わせとしては，「利用」よりも「搾取」の方が適切であると訳者は判断したのであろう。ここでは翻訳の基本原則よりも，資本主義的農業の批判というマルクスの意図を訳文に移すことが優先されたものと思料される。これ以降の邦訳でもすべての訳者がこの個所を「搾取」と訳している。

ところで，ここでマルクスはなぜ「土地力の Exploitation」という語句を明らかな批判的・否定的文脈の中に置いたのであろうか。考えられる理由としては，『資本論』第1巻の次のような叙述と同様な彼の問題意識を挙げることができる。

> 資本は労働力の生存期間を短縮することに依って，この標的に到達する。それは恰度，貪欲な農夫が土地の豊度を濫奪（Beraubung）することに依って，収穫を増大させるのと同様である。（マルクス 1927，239 頁。Marx 1962, 281 頁）

> 資本制農業の如何なる進歩も，単に労働者から掠奪（berauben）すべき技術上の進歩たるのみではなく，また土地から奪取（berauben）すべき技術上の進歩ともなる（マルクス 1927，490 頁。Marx 1962, 529 頁）

『資本論』第1巻の剰余価値論では，労働力の再生産を阻害するような長時間労働が資本による土地の取り扱いと対比され，Beraubung という語で表現されている。労働者の寿命を縮める過度労働は，単なる Exploitation（搾取）の域を超えてもはや Beraubung（濫奪，掠奪，奪取）であり，それは資本による土地の Beraubung とパラレルな関係にあるのである。

そもそも『資本論』第1巻の本文において Exploitation という語が最初に登場するのは，Exploitationsgrad der Arbeitskraft（Marx 1962, 232 頁）として，「労働力の搾取度」としてであって，「搾取」にとってはその度合いが重要である。その際，労働力の搾取が一定の度合いを超過すると労働力の再生産に支障をきたすこととなるが，その場合，搾取は過剰な搾取となり，掠奪 Beraubung の域に達する（山口 2013, 81 頁参照）。同じように，土地力の Exploitation にも度合い

があり，土地力の持続可能な水準を超えて過剰な Exploitation が行われると Beraubung の域に達する。『資本論』第 3 巻の die Exploitation und Vergeudung der Bodenkräfte の中の Exploitation は，このような過剰な Exploitation のことであろうと考えられる。

いずれにしても，高畠訳『資本論』の用語体系を尊重する限り，Ausbeutung des Naturreichtums を「自然富の搾取」と訳し直すことは，適切であるとはいえない，と考えられる。

3　長谷部文雄訳青木書店版『資本論』

長谷部文雄は，「高畠訳の欠陥を一応克服した，最大公約数的な翻訳を仕上げてみたいと念願」して『資本論』の翻訳にとりかかった（長谷部 1956，25 頁）。その際，彼は「全巻の立場からできるだけ適当な訳語を選択，統一しようとした」（同上，26 頁）ことを自身の翻訳の長所の 1 つとして挙げている。

長谷部は Exploitation ／ Ausbeutung の訳語として高畠訳『資本論』の「搾取」と「利用」を引き継ぎ，その訳し分け，すなわち人間に対しては「搾取」，それ以外に対しては「利用」を用いるという翻訳の基本原則も引き継いでいる。しかし，「搾取」という語の使用範囲については，長谷部訳は高畠訳と異なっている。前項で見たように，高畠は Exploitation ／ Ausbeutung だけでなく Aussaugung，abpressen，auspressen，erpressen も「搾取」と訳していたが，『資本論』第 1 巻を調べる限り，長谷部は Exploitation ／ Ausbeutung 以外の語に対しては「搾取」という訳語を用いていない[9]。高畠が「搾取」とした maßloser Aussaugung der Arbeitskraft（Marx 1962, 253 頁）と in der Aussaugung der bezahlten Arbeitskraft（Marx 1962, 268 頁）の中の Aussaugung は長谷部訳では「吸取」と訳されている。また，Nur die Form, worin diese Mehrarbeit dem unmittelbaren Produzenten, dem Arbeiter, abgepreßt wird（Marx 1962, 231 頁）という文の中の abgepreßt wird は「絞り取られる」と訳されている。さらに，um mehr “Mehrarbeit” auszupressen（Marx 1962, 262 頁）は「搾り取る」と訳されており，die vom Kapital erpreßbare Zufuhr der Arbeit（Marx 1962, 323 頁）については「強取されうる」と訳されている。

このように，長谷部は「吸取」や「強取」という耳慣れない語を用いてまで Exploitation ／ Ausbeutung 以外の用語に対して「搾取」を使うことを避けている。さらに「絞り取る」を abpressen に，「搾り取る」を auspressen に対して使うことによって，Exploitation ／ Ausbeutung の訳語としての「搾取」を「搾り取る」から区別している。そして，Auspumper von Mehrarbeit und Exploiteur von Arbeitskraft（Marx 1962, 328 頁）も，「剰余労働の汲出者および労働力の搾取者」（マルクス 1954a，524–525 頁）と訳されており，高畠訳の「搾り取る」ではなく「搾取」となっている。

長谷部訳では Exploitation ／ Ausbeutung の訳語は概ね「利用」または「搾取」であり，「搾取」と訳される用語は Exploitation ／ Ausbeutung だけである。「搾り取る」は Exploitation ／ Ausbeutung ではない語の訳語として使われているから，「搾取」と「搾り取る」とは区別されていることになる。

内田義彦が『資本論の世界』で用いた『資本論』は，この長谷部訳であった。内田は，アウスボイトゥングの接頭辞「アウス」を「徹底的に」と捉えて「搾取」を「徹底的に利用する」と言い換えているが，長谷部訳における「搾取」

9）ただし，長谷部訳においても第 3 巻には Auspressung と Abpressung が「搾取」と訳されている個所がある（Marx 1964, 54–55 頁。マルクス 1954b，96 頁）。これは新旧の新日本出版社版でも同様であるが，長谷部訳に関してはミスではないかと考えられる。

の意味を「徹底的に利用する」あるいは「徹底的利用」と理解することは可能であると考えられる。というのは，上で見たように，長谷部訳では「搾取」は「搾り取る」から区別されており，また基本的に「利用」と「搾取」のみをExploitation／Ausbeutungの訳語として用いていることにより「搾取」は「利用」の言い換え可能な類語であると見なしうるからである。すなわち「搾取」は「利用」の一形態ではあるが，単なる「利用」ではなく「搾り取るような利用」，「徹底的な利用」であると理解することができるのである。このことは，例えば次の文の翻訳によって示されているといえる。

> Ausbeutung des Arbeiters durch die Maschine ist ihm also identisch mit Ausbeutung der Maschine durch den Arbeiter（Marx 1962, 465 頁）
> つまり，機械による労働者の搾取は，彼にとっては，労働者による機械の搾取〔利用〕と同一事である。（マルクス 1954a，712 頁）

ここで，長谷部は 2 つ目の Ausbeutung を「搾取〔利用〕」と訳しているが，これはなぜであろうか。おそらくそれは，人間に対しては「搾取」，それ以外に対しては「利用」を用いるという翻訳原則からすれば，2 つ目の Ausbeutung は「利用」とされるべきだが，それでは Ausbeutung を意図的に繰り返したマルクスの修辞法を訳文に再現できなくなる。このため 2 つ目の Ausbeutung を「搾取〔利用〕」とした，ということであろう。しかし，この処置によって，「搾取」が「利用」の類語であり，「搾り取るような利用」「徹底的利用」であることが暗示されているといえる。これは高畠訳と比べると大きな前進であって，この文は高畠訳では次のようになっていた。

> だから彼れの目には，機械に依る労働者からの搾取という事と，労働者に依る機械からの搾取という事との間には区別がなくなり（マルクス 1927，426 頁）

ここで高畠は，人間に対しては「搾取」，それ以外に対しては「利用」を用いるという自分自身の翻訳原則に従わず，機械に対する Ausbeutung も「搾取」と訳している。その理由としては，この一文を含む段落全体がブルジョア経済学者を揶揄する内容となっているため，この文も冗談ないし皮肉の一種と理解し，訳語の使い分けに拘泥することなくマルクスの修辞法の再現を優先して処理した，ということが考えられる。しかし，本稿の視角から見てもっと興味深いのは，「機械からの搾取」という表現によって，高畠の「搾取」という語の理解がよく示されているという点である。「搾取」が「利用」の類語ならば，「機械からの搾取」を「機械からの利用」と言い換えることもできるはずだが，「機械からの利用」という表現は極めて不自然であり，むしろ誤った日本語表現といえるものである。だから，この場合の「搾取」は「利用」の類語ではなく，文字通り「搾り取る」という意味の「搾取」であることが分かる。しかし，「搾取」が「搾り取る」ことであるならば，この場合，機械から何を搾り取るのであろうか。この一文をマルクスの皮肉と理解するとしても，高畠訳ではあまり筋の良い皮肉にはならない。一方，長谷部訳のように Ausubeutung を「搾取〔利用〕」とし，これを「搾取的な利用」「徹底的な利用」の意味だと捉えてあの一文を読めば，皮肉だとしても十分に意味の通った文になる。

そういうことで，長谷部訳『資本論』の中の「搾取」という語は，内田義彦が『資本論の世界』において Ausbeutung の語義に即して提示した「搾取」概念と同じものとして理解することができると考えられる。そして，もしそうであるとすれば，長谷部訳『資本論』の世界においては，内田のいう「自然の搾取」という概念についても，これが十分に成立すると考えることが

できるかもしれない。

この点をさらに検討するために，『資本論』第 1 巻の次の文を取り上げたい。

> daß die Minen des Elends von Häuserspekulanten mit mehr Profit und weniger Kosten ausgebeutet werden als jemals die Minen von Potosi.（Marx 1962, 687 頁）
> 貧困という鉱山が家屋投機師たちにより，かつてのポトシの鉱山の場合よりも多くの利潤と僅かの費用とをもって搾取される。（マルクス 1954a，1015 頁）

このように，ここでは「鉱山が‥‥搾取される」と訳されている。もちろん，この場合の「鉱山」は「貧困」のことであって，貧困は人間そのものではないにしても人間に関する事柄であり人間の状態であるから，これに対して「搾取」という訳語を用いることは，あの翻訳原則から大きく逸脱することにはならないといえる。とはいえ，高畠訳ではこの個所は「利用される」と訳されており，次に見る岡崎訳や向坂訳でも「搾取」とは訳されていない。ここを何の但し書きも加えずに「搾取される」と訳しているのは長谷部だけである。このことは，「利用」と「搾取」の訳し分けが，訳者の問題意識によって変わりうるということを示している。

また，邦訳『資本論』の中に「鉱山が搾取される」という表現があることは，本稿の主題である「自然の搾取」論義にとって重要である。内田義彦が，アウスボイトゥングとは「野を耕すとか，鉱山を掘りつくすこと」であると述べているように，鉱山の Ausbeutung ／ Exploitation は，このドイツ語／フランス語の元来の用法である。そもそも「鉱山の Ausbeutung ／ Exploitation」を「鉱山の利用」や「鉱山の開発」とするのが通常の翻訳であって，これを何の抵抗感もなく「鉱山の搾取」と訳せないところに，「搾取」という訳語の不適切性が表れている。しかし，それでも長谷部は，「鉱山」に対して「搾取」という語を用いた。そして，「鉱山の搾取」は「自然の搾取」の典型例である。であるとすれば，ここからさらに一歩進んで，今後 Ausbeutung des Naturreichtums を「自然的富の搾取」と訳すことも，決して不適切なこととはいえないと考えられる。少なくともそれは，長谷部文雄の訳業を尊重することと齟齬をきたすものではないといえる。

4　岡崎次郎訳大月書店全集版と向坂逸郎訳岩波文庫版『資本論』

1960 年代半ばに，ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編集 *Karl Marx ／ Friedrich Engels Werke*（ヴェルケ版）を底本とする大月書店『マルクス＝エンゲルス全集』の中の『資本論』が刊行された。翻訳者は岡崎次郎であるが，この大月書店全集版は長谷部訳に替わって多くの読者を見出すこととなった。しかし，この岡崎訳は，内田義彦の『資本論の世界』の読者にとっては，必ずしも適切な訳本とはいえない。というのは，内田に触発されて岡崎訳『資本論』に出てくる「搾取」を原書で調べてみると，アウスボイトゥングではない語に出会うことが少なくないからである。

岡崎訳では，長谷部が「吸取」と訳した Aussaugung が「搾取」と訳されている。高畠訳でも Aussaugung は「搾取」と訳されていたが，高畠はこの語をすべて「搾取」としたわけではなく，「吸取」や「吸い尽くす」と訳している個所もある。ところが岡崎訳では，高畠が「吸取」としたところも含めてすべての Aussaugung，およびその動詞形が「搾取」と訳されている。さらに岡崎訳では，die Extraktion von Mehrarbeit（Marx 1962, 315 頁）も「剰余労働の搾取」（マルクス 1965，392 頁）と訳されている。これは他の訳本にはない岡崎訳の特徴で

ある。長谷部訳では「搾取」はAusbeutung／Exploitationに専属する訳語として使われていたが，岡崎訳では高畠訳のような翻訳方式に戻っている。「搾取」の担当領域が再度拡張され，「搾取」とAusbeutung／Exploitationとのズレが再び生じているのである。

また，「搾取」という訳語を人間にしか用いないという翻訳原則の適用についても，岡崎訳は長谷部訳とは異なる方向に向かっている。前項で取り上げたAusbeutung des Arbeiters durch die Maschine ist ihm also identisch mit Ausbeutung der Maschine durch den Arbeiter（Marx 1962, 465頁）という文は，「だから，機械による労働者の搾取は，彼にとっては労働者による機械の利用と同じことなのである」（マルクス1965，578頁）と訳されている。長谷部訳では「機械の搾取〔利用〕」となっていたが，ここでは単に「利用」とされたため，1つの文の中でAusbeutungを2度用いた著者の意図がまったく伝わらない訳文になっている。マルクスの修辞法を再現するよりも，人間に対しては「搾取」，それ以外に対しては主に「利用」を用いるという翻訳原則の順守の方が重視されたのであろう。そして，長谷部が「貧困という鉱山が……搾取される」と訳したところのdie Minen des Elends …… ausgebeutet werdenが含まれる文は，「貧困という鉱山は，かつてポトシの鉱山が採掘された時よりももっと多くの利潤ともっと少ない費用とで家屋投機師たちの手で採掘される」（マルクス1965, 858頁）と訳されており，「搾取」は用いられていない。岡崎訳では，「搾取」を人間に対してのみ用いるという翻訳原則が高畠訳と長谷部訳よりもさらに徹底して適用されている。その結果，「搾取」とは労働者から剰余価値を搾り取ることだという理解をより強く読者に届ける翻訳となっている。長谷部訳ではAusbeutung des Naturreichtumsを「自然的富の搾取」と訳し直すことを許容する可能性が生じていたが，岡崎訳ではこの可能性が後退しているといわざるをえない。

『資本論』を初めて読む読者にとって，岡崎訳は日本語がこなれていて大変読みやすい訳本である。しかし，本稿が主題とする「自然の搾取」論とは相性が良いとはいえない。むしろ岡崎訳だけを読んでいる限り，「自然的富の搾取」という表現は『資本論』の剰余価値論に馴染まない表現であると評価され，支持を得られない可能性が高いといえる。とはいえ，岡崎訳が『資本論』市場を制覇したというわけではなかった。というのは，市場には読者にとってより近づきやすい向坂訳『資本論』が流通していたからである。

向坂逸郎は日本社会党左派の理論家として著名であっただけでなく，彼の翻訳による『資本論』は権威ある岩波文庫版として出版された。このため向坂訳は影響力が大きい訳本であったといえ，また現在でも最も入手が容易な日本語版『資本論』である。しかがって，その影響力は現在も続いているといえる。

向坂訳においても，人間に対しては「搾取」，それ以外に対しては主に「利用」を用いるという翻訳原則が適用されている。しかし例外もあり，しかもそれが際立った例外になっている。例えば，『資本論』第1巻第8章第3節「搾取にたいする法的制限を欠くイギリスの産業諸部門」の中に，過労死した女工についての新聞報道が取り上げられている部分があるが，その中に次のような文がある。

> それは，ある非常にりっぱな宮廷用婦人服製造所に働いていて，エリズというやさしい名前の一婦人に搾り上げられた（exploitiert）メリ・アン・ウォークリという，二〇歳の婦人服製造女工の死亡にかんするものだった。（マルクス1969a，132頁）

このexploitiertを「搾り上げられた」と訳しているのは向坂だけである。長谷部は「搾取さ

れた」と訳し，岡崎訳と新旧の新日本出版社訳では「搾取されていた」と訳されている。高畠は「利用されていた」と訳しているが，exploitieren を「搾り上げられた」と訳すことは，労働者に対する Exploitation ／ Ausbeutung には「搾取」を用いるという基本原則から逸脱するものである。向坂は Aussaugung についても「搾取」と訳したり「吸取る」と訳したりしているから，「搾取」関連の翻訳原則に対しては長谷部や岡崎と比べて緩く対応していたのであろう。この緩さという点は，とりわけラダイト運動に関する次の訳文に表れている。

> bevor der Arbeiter die Maschinerie von ihrer kapitalistischen Anwendung unterscheiden und daher seine Angriffe vom materiellen Produktionsmittel selbst auf dessen gesellschaftliche Exploitationsform übertragen lernt.（Marx 1962, 452 頁）
> 労働者が機械装置を，その資本主義的使用から区別し，したがって，彼の攻撃を物的生産手段そのものから，その社会的搾取形態に転ずることを知るまでには（マルクス 1969a, 417 頁）

この文で，「その（dessen）」は「物的生産手段」を指すから，ここでは「物的生産手段の搾取」という表現が使われていることになる。これは，労働者には「搾取」，人間以外には「利用」を使うという翻訳原則から逸脱する翻訳である。しかもこの個所は，前項で見た「機械による労働者の Ausbeutung と労働者による機械の Ausbeutung」のような修辞的な文ではない。このためこの個所は，高畠訳，長谷部訳，岡崎訳，新旧の新日本訳すべてで「利用」が使われている。なぜここで向坂が訳語として「搾取」を選んだのかは不明だが，「生産手段の搾取」という表現が向坂訳に存在することは重要である。この表現が権威ある岩波文庫版『資本論』に存在するのであれば，今後「自然的富の搾取」という語句を含む『資本論』が出現することになったとしても，大きな問題にはならないであろうと推察されるからである。

高畠訳以来の翻訳基本原則は，向坂訳『資本論』においても適用されている。しかし，向坂訳には目立った例外があり，長谷部訳や岡崎訳に見られたような訳語選択の一貫性がない。むしろ原則が緩く適用されているといえる。このため向坂訳は，Ausbeutung des Naturreichtums を「自然的富の搾取」と訳し直すことに対して，特に障害となる存在ではないと考えられる。

5　資本論翻訳委員会訳新日本出版社版と新日本出版社版改定訳

1980 年代に資本論翻訳委員会による邦訳『資本論』が新日本出版社から刊行された（以下では委員会訳と略記する）。これは，専門の研究者を動員して行われた翻訳であるだけに信頼性が高く，また訳注が充実しているため有用性も高い訳本である。本稿の関心である Exploitation ／ Ausbeutung の翻訳方式について見る限り，それは長谷部訳の方針を踏襲したものになっているといえる。すなわち，一部例外はあるものの[10]，Exploitation ／ Ausbeutung の訳語は概ね「利用」または「搾取」であり，「搾取」と訳される用語は Exploitation ／ Ausbeutung だけである。

また，「しぼり取る」が Exploitation ／ Ausbeutung ではない語の訳語として使われていることで，「搾取」と「しぼり取る」とが区別されている。例えば maßloser Aussaugung der Arbeitskraft（Marx 1962, 253 頁）の中の Aussaugung を高畠と岡崎は「搾取」と訳し，長谷

10）第 1 巻第 22 章第 3 節に aussaugt（Marx1962, 620 頁）を「搾取する」（マルクス 1983, 1019 頁）と訳している個所がある。この個所は長谷部訳では「吸取して」となっている。

部は「吸取」と訳していたが，委員会訳では「しぼり取ろうとする」と訳されている。dem unmittelbaren Produzenten, dem Arbeiter, abgepreßt wird（Marx 1962, 231 頁）の中の abgepreßt wird も高畠訳では「搾取する」と訳されていたが，委員会訳では「しぼり取られる」と訳されている。

こうしたことから，長谷部訳と同じように委員会訳においても「搾取」を「利用」の類語として理解することが可能になっているといえる。すなわち「搾取」は「利用」の一形態ではあるが，単なる「利用」よりも遠慮のない露骨な「利用」であり，「搾り取るような利用」，「徹底的な利用」であると理解することができる。このことは，Ausbeutung der Maschine durch den Arbeiter（Marx 1962, 465 頁）を「労働者による機械の搾取〔利用〕」（マルクス 1983, 764 頁）と訳していることからも分かることであり，これも長谷部訳と同様の翻訳処理である。

一方，長谷部が「貧困という鉱山が‥‥搾取される」と訳したところの die Minen des Elends …… ausgebeutet werden（Marx 1962, 687 頁）が含まれる文は，「貧困という鉱山は‥‥開発〔搾取〕される」（マルクス 1983, 1128 頁）と訳されている。これは，長谷部訳からは一歩後退した訳に見えるが，しかし同じ個所を単に「採掘する」と訳した岡崎訳と向坂訳よりは前進しており，さらにこの「開発〔搾取〕」という翻訳処理には独自の長所を見出すこともできる。というのは，「開発〔搾取〕」という表記により，『資本論』では「開発」と「搾取」が置き換え可能な用語であることが分かるからであり，これに前の段落で見た「搾取〔利用〕」を加えると，Exploitation ／ Ausbeutung の意味の広がりが「開発」「利用」「搾取」であることも分かるからである。もし日本語の中に「開発」「利用」「搾取」の意味をすべて包含した単語があったとすれば，本稿のような考察はそもそも存在していなかったであろう。しかし，そのような単語がない以上，「搾取」という単語に「開発」および「利用」という意味も担ってもらう必要がある。そこで，「搾取〔利用〕」「開発〔搾取〕」という不完全な訳語を，「搾取」による「利用」と「開発」の取り込み過程の途上の表現であると見なせば，今後この取り込み過程が完了し，「自然の搾取」という表現が自然に響く時代が到来するかもしれない。少なくとも，このような期待を抱かせる訳本になっていると解釈したい。

とはいえ，委員会訳にはこのような方向性とは逆に見えるような翻訳処理も存在する。それは，「児童 “搾取”」という表記であるが，これは次の文の中に出てくる。

> マニュファクチュアの発生とともに，ずっと以前からある程度まで農民のあいだに実存している児童 “搾取” の徴候が姿を現わし，農村住民にのしかかるくびきが重くなればなるほど，児童搾取も発展するということは正しい。（マルクス 1983，471 頁）

この訳文では搾取が引用符で括られて「児童 “搾取”」となっている。しかし，原文は sich Spuren der Kinderexploitation zeigen（Marx 1962, 289 頁）となっており，引用符は使用されていない。このため高畠訳，長谷部訳，岡崎訳，向坂訳においても引用符は使用されていない。なぜ，委員会訳では搾取が引用符で括られたのであろうか。翻訳者の真意は不明だが，これによって読者としては，農民による児童搾取はカッコ付きの搾取であって，資本家が剰余価値生産のために労働者に対して行う本来の搾取とは異なること，このことが引用符によって示されている，と理解するであろう。しかし，読者がこのような理解に導かれる必要はないと思われる。農民が金銭を得るために子供を工場に働きに行かせることも子供の徹底的な利用であって，Exploitation ／ Ausbeutung そのものであり，

この意味では紛れもなく搾取だからである。

搾取に付されたこの引用符は，新しい新日本出版社版では取り除かれている。

資本論翻訳委員会訳を改訂した新しい新日本出版社版の『資本論』が 2019 年から 2021 年にかけて出版された（以下では改訂訳と略記する）。この改訂訳は活字が大きくなっているため，高齢者にとっては有難い訳本である。本稿の主題である Exploitation ／ Ausbeutung の翻訳方式については，改訂訳は委員会訳とほとんど変わっていない。上で触れた引用符の除去以外で目に付く点としては，委員会訳で「吸い取る」と訳されていた in der Aussaugung der bezahlten Arbeitskraft（Marx 1962, 268 頁）の中の Aussaugung の訳語を「しぼり取る」（マルクス 2019，439 頁）に変更したことが挙げられる。これは，この Aussaugung を「搾取」と訳した高畠訳，岡崎訳，向坂訳に再度近づいたというよりも，Aussaugung に対して「しぼり取る」という語を使用したことで，Exploitation ／ Ausbeutung の訳語としての「搾取」から「しぼり取る」を区別したと解釈したい。これによって「搾取」という訳語が，「しぼり取る」という文字通りの意味から内田がいうところの「徹底的な利用」にさらに近づき，Exploitation ／ Ausbeutung の意味をよりよく届ける訳語に成長したと評価できるからである。

6 ま と め

高畠訳では，Exploitation ／ Ausbeutung を日本語に直す際，労働者には「搾取」，人間以外には「利用」という訳語を用いることが事実上の基本原則となっていた。これにより，ドイツ語原文では労働者や労働力に対してだけでなく自然的富や鉱山や土地に対しても同じ Exploitation ／ Ausbeutung という語が使われていることが邦訳では見えなくなった。これに加えて高畠訳では「搾取」が Exploitation ／ Ausbeutung 以外のドイツ語単語の訳語としても使用され，また「搾取」が文字通り「搾り取る」の意味で使用されているところもあるため，「搾取」を「労働者からの剰余価値の搾り取り」に限定して解釈する傾向を読者に強く植え付ける訳本になっていた。もし「搾取」が「剰余価値の搾取（搾り取り）」を意味するのであれば，「自然の搾取」という表現は労働価値説と矛盾する不適切な表現とされることになる。

長谷部訳においても，労働者には「搾取」，人間以外には「利用」を用いるという基本原則が適用されている。しかし，長谷部訳では「搾取」が Exploitation ／ Ausbeutung の訳語としてのみ使用されており，「搾取」という訳語を「搾り取る」という意味から区別しようとする工夫の跡が見られる。また，「機械の搾取〔利用〕」という表現や「鉱山の‥‥搾取」という表現もある。内田義彦が用いた訳本はこの長谷部訳であったが，長谷部訳の方向性に沿って進むならば，そこに成立する「搾取」概念は，内田のいう「自然の搾取」を排除するものにはならないと考えられる。

岡崎訳では，「搾取」が再び Exploitation ／ Ausbeutung 以外のドイツ語単語の訳語としても使用されているだけでなく，労働者には「搾取」，人間以外には「利用」を用いるという基本原則が厳格に適用されていて，長谷部訳とは逆方向に進んでいる。向坂訳は，全体としては岡崎訳と変わらないものだが，翻訳の基本原則の適用において目立った例外があり，この例外に着目すれば，向坂訳は「自然的富の搾取」という語句を排除するものではない。そして，委員会訳およびその改訂訳では，Exploitation ／ Ausbeutung の翻訳方針が長谷部訳のそれに回帰している。

本稿で着目した Ausbeutung der Maschine durch den Arbeiter（Marx 1962, 465 頁）の中の Ausbeutung der Maschine の翻訳の変遷を振り返ってみると，「機械からの搾取」（高畠訳）→

「機械の搾取〔利用〕」（長谷部訳）→「機械の利用」（岡崎訳）→「機械の利用」（向坂訳）→「機械の搾取〔利用〕」（委員会訳）→「機械の搾取〔利用〕」（改訂訳），となっており，これまでの検討を踏まえるならば，本稿の見地からは，「搾取」という訳語自身が「搾り取る」という意味の語から「利用」の類語へと変化したがっていると受け取ることができる。また，die Minen des Elends …… ausgebeutet werden（Marx 1962, 687 頁）の中の ausgebeutet werden の翻訳の変遷を振り返ってみると，「利用される」（高畠訳）→「搾取される」（長谷部訳）→「採掘される」（岡崎訳）→「採掘される」（向坂訳）→「開発〔搾取〕される」（委員会訳）→「開発〔搾取〕される」（改訂訳），となっており，本稿の見地からは「搾取」という訳語自身が「利用」のみならず「開発」の類語にもなりたがっていると受け取ることができる。

もともと Exploitation ／ Ausbeutung は「利用」「開発」という意味を持っており，『資本論』ではこの意味の広がりを生かしつつこの語が使用されている。そして，このことは内田義彦が『資本論の世界』で指摘していたところのものである。内田によれば「自然の搾取（アウスボイトゥング）」とは鉱山を開発するように人間が自然を徹底的に利用することであり，また「労働者の搾取」とは労働者を徹底的に利用することである。そして，この自然と人間の徹底的利用によって生産されるのが剰余価値だ，ということになる。

もともとは文字通り「搾り取る」という意味であった「搾取」が，百年を超える『資本論』翻訳の歴史の風雪の中で磨かれ，内田のいう「徹底的な利用」という意味に，Exploitation ／ Ausbeutung の本来の意味に，近づいてきたといえる。「搾取」が Exploitation ／ Ausbeutung の訳語とされてきたことで，後者の意味が前者の中に染み込みつつあるともいえる。この方向性での変化がさらに進むとすれば，今後新たに刊行されるかもしれない新訳『資本論』においては，Ausbeutung des Naturreichtums が「自然的富の搾取」と訳されることもありうるであろうと考えられる。

（2026 年 7 月 6 日受理）

引 用 文 献

内田義彦（1966）『資本論の世界』岩波新書。

韓立新（2001）『エコロジーとマルクス――自然主義と人間主義の統一』時潮社。

斎藤幸平（2019）『大洪水の前に――マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版。

斎藤幸平（2020）『人新世の「資本論」』集英社新書。

島崎隆（2007）『エコマルクス主義――環境論的転回を目指して』知泉書館。

高畠素之（1919）『マルクス学研究』公文書院。

滝澤紗矢子・伊永大輔・大久保直樹編（2025）『優越的地位濫用規制の現在地と新展開――デジタル時代の搾取規制』有斐閣。

趙民秀（2023）「暴利行為の現代的意義――搾取排除法理としての位置付けの試み」（1）・（2）関西学院大学法政学会『法と政治』第 74 巻第 2 号・第 3 号，2023 年 10 月・11 月，73-130 頁・107-224 頁。

趙民秀（2024）「暴利行為の現代的意義――搾取排除法理としての位置付けの試み」（3・完）関西学院大学法政学会『法と政治』第 74 巻第 4 号，2024 年 3 月，147-247 頁。

長谷部文雄（1956）『資本論隨筆』青木書店。

ヒッケル，ジェイソン（2023）『資本主義の次に来る世界』野中香方子訳，東洋経済新報社。

松井暁（2024）『社会民主主義と社会主義』専修大学出版局。

マルクス，カール（1927）『資本論　第 1 巻』（全 2 分冊）高畠素之訳，改造社。

マルクス，カール（1928）『資本論　第 3 巻』（全 2 分冊）高畠素之訳，改造社。

マルクス，カール（1954a）『資本論　経済学批判第 1 部』（全 2 分冊）長谷部文雄訳，青木書店。

マルクス，カール（1954b）『資本論　経済学批判第 3 部』（全 2 分冊）長谷部文雄訳，青木書店。

マルクス，カール（1965）「資本論　経済学批判第 1 巻　第 1 部　資本の生産過程」『マルクス＝エンゲルス全集第 23 巻』（全 2 分冊）大内兵衛・細川嘉六監訳，岡崎次郎訳，大月書店。

マルクス（1969a）『資本論（二）』エンゲルス編，向坂逸郎訳，岩波文庫。
マルクス（1969b）『資本論（三）』エンゲルス編，向坂逸郎訳，岩波文庫。
マルクス，カール（1983）『資本論　第１巻』第２･３･４分冊，資本論翻訳委員会訳，新日本出版社。
マルクス，カール（2019）『新版　資本論　第１巻』第１・２分冊，日本共産党中央委員会社会科学研究所監修，新日本出版社。
マルクス，カール（2020）『新版　資本論　第１巻』第３・４分冊，日本共産党中央委員会社会科学研究所監修，新日本出版社。
守健二（2001）「マルクス主義と環境社会主義――『自然支配』と『搾取』」（シンポジウム「社会主義の再生とその可能性――環境社会主義のフロンティア」大分地方自治センター主催，2001年10月6日）。
山口拓美（2013）『利用と搾取の経済倫理――エクスプロイテーション概念の研究』白桃書房。
山口拓美（2024）「カウツキー版『資本論』における Exploitation の Ausbeutung への言い換えについて――内田義彦のアウスボイトゥング（搾取）論からの一考察」神奈川大学経済学会『商経論叢』第59巻第3号，2024年3月，13-28頁。
吉原直毅（2008）『労働搾取の厚生理論序説』岩波書店。
Hickel, Jason. 2020. *Less is More : How Degrowth Will Save the World*. Penguin Books.
Marx, Karl. 1962. Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie : Erster Band, Buch I : Der Produktionsprozeß des Kapitals. *Karl Marx / Friedrich Engels Werke. Band 23*. Berlin : Dietz Verlag.
Marx, Karl. 1964. Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie : Dritter Band, Buch III : Der Gesamtprozeß der kapitalistischen Produktion. Herausgegeben von Friedrich Engels. *Karl Marx / Friedrich Engels Werke. Band 25*. Berlin : Dietz Verlag.
Marx, Karl. 1976. *Capital : A Critique of Political Economy. Volume One*. Translated by Ben Fowkes. Introduced by Ernest Mandel. London : Penguin Books.
Marx, Karl. 1987. Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie : 1. Bd., Hamburg 1872. *Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe*（*MEGA*）. *Zweite Abteilung. Band 6*. Berlin : Dietz Verlag.
Marx, Karl. 1990. Capital, a critical analysis of capitalist production : London 1887. *Karl Marx / Friedrich Engels Gesamtausgabe*（*MEGA*）. *Zweite Abteilung. Band 9*. Berlin : Dietz Verlag.
Marx, Karl. 2024. *Capital : critique of political economy. Volume 1*. Translated by Paul Reitter ; edited by Paul Reitter and Paul North. Princeton : Princeton University Press.

On Uchida Yoshihiko's concept of exploitation

Abstract

This study concerns the Japanese translation of *Capital*. When Takabatake Motoyuki first translated all three volumes of *Capital* in Japan, he rendered "Ausbeutung der Arbeitskraft" as "roudouryoku no sakushu" while translating "Ausbeutung des Naturreichtums" as "shizenfu no riyou". This translation method was adopted by subsequent translators as well, so even today, Japanese translations of *Capital* do not contain expressions such as "shizenfu no sakushu" or "tochi no sakushu." However, these circumstances have given rise to several inconveniences. This paper compares and examines six Japanese translations of *Capital* and discusses the appropriateness of translating "exploitation of natural wealth" as "shizenteki tomi no sakushu."